

ろくろ首

五百年程前に、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連たけつらと云ふ人がゐた。この人は代々武勇にすぐれた祖先からの遺傳で、生れながら弓馬の道に精しく非凡の力量をもつてゐた。未だ子供の時から劍道、弓術、槍術では先生よりもすぐれて、大膽で熟練な勇士の腕前を充分にあらはしてゐた。その後、永享年間（西暦一四二九—一四四一）の亂に武功をあらはして、ほまれを授かつた事度々であつた。しかし菊池家が滅亡に陥つた時、磯貝は主家を失つた。外の大名に使はれる事も容易にできたのであつたが、自分一身のために立身出世を求めようとは思はず、又以前の主人に心が残つてゐたので、彼は浮世を捨てる事にした。そこで剃髮して僧となり——回龍と名のつて——諸國行脚に出かけた。

しかし僧衣の下には、いつでも回龍の武士の魂が生きてゐた。昔、危険をものとしなかつたと同じく、今は又難苦を顧みなかつた。それで天氣や季節に頓着なく、外の僧侶達の敢て行かうとしない處へ、聖い佛の道を説くために出かけた。その時代は暴戾亂雜の時代であつた。それだとへ僧侶の身でも、一人旅は安全ではなかつた。

始めての長い旅のうちに、回龍は折があつて、甲斐の國を訪れた。或夕方の事、その國の山間を旅して居るうちに、村から數里を離れた、甚だ淋しい處で暗くなつてしまつた。そこで星の下で夜をあかす覺悟をして、路傍の適當な草地を見つけて、そこに臥して眠りにつかうとした。彼はいつも喜んで不自由を忍んだ。それで何も得られない時には、裸の岩は彼にとつてはよい寢床になり、松の根はこの上もない枕となつた。彼の肉體は鐵であつた。露、雨、霜、雪になやんだ事は決してなかつた。

横になるや否や、斧と大きな薪の束を背負うて道をたどつて來る人があつた。この木こりは横になつて居る回龍を見て立ち止まつて、しばらく眺めてゐたあとで、驚きの調子で云つた。

『こんなところで獨りでねて居られる方は、そもそもどんな方でせうか。……このあたりには變化けのものが出ます——澤山に出ます。あなたは魔物を恐れませんか』

回龍は快活に答へた、『わが友、わしはただの雲水ぢや。それ故少しも魔物を恐れない、——たとへ化け狐であれ、化け狸であれ、その外何の化けであれ。淋しい處は、かへつて好む處、そんな處は黙想をするのによい。わしは大空のうちに眠る事に慣れて居る、それから、わしのいのちについて心配しないやうに修業を積んで來た』

『こんな處に、お休みになる貴僧は、全く大膽な方に相違ない。ここは評判のよくない——甚だよくない處です。「君子危きに近よらず」と申します。實際こんな處でお休みになる事は甚だ危険です。私の家はひどいあばらやですが、御願です、一緒に來て下さい。喰べるものと云つては、

さし上げるやうなものはありません。が、とにかく屋根がありますから安心してねられます』熱心に云ふので、回龍はこの男の親切な調子が氣に入つて、この謙遜な申出を受けた。きこりは往來から分れて、山の森の間の狭い道を案内して上つて行つた。凸凹の危険な道で、——時々斷崖の縁を通つたり、——時々足の踏み場處としては、滑りやすい木の根のからだものだけであつたり、——時々尖つた大きな岩の上、又は間をうねりくねつたりして行つた。しかし、やうやく回龍は或山の頂きの平らな場所へ來た。満月が頭上を照らしてゐた。見ると自分の前に小さな草ふき屋根の小屋があつて、中からは陽氣な光がもれてゐた。きこりは裏口から案内したが、そこへは近處の流れから、竹の笕で水を取つてあつた。それから二人は足を洗つた。小屋の向うは野菜畠につづいて、竹藪と杉の森になつてゐた。それからその森の向うに、どこか遙かに高い處から落ちて居る瀧が微かに光つて、長い白い着物のやうに、月光のうちに動いて居るのが見えた。

回龍が案内者と共に小屋に入つた時、四人の男女が爐にもやした小さな火で手を煖めて居るのを見た。僧に向つて丁寧にお辭儀をして、最も恭しき態度で挨拶を云つた。回龍はこんな淋しい處に住んで居るこんな貧しい人々が、上品な挨拶の言葉を知つて居る事を不思議に思つた。『これはよい人々だ』彼は考へた『誰かよく禮儀を知つて居る人から習つたに相違ない』それから外のものが『あるじ』と云つて居るその主人に向つて云つた。

『その親切な言葉や、皆さんから受けた甚だ丁寧なもてなしから、私はあなたを初めからのきこ

りとは思はれない。多分以前は身分のある方でしたらう』

きこりは微笑しながら答へた。

『はい、その通りでございます。只今は御覽の通りのくらしをしてゐますが、昔は相當の身分でした。私の一代記は、自業自得で零落したものの一代記です。私は或大名に仕へて、重もい役を務めてゐました。しかし餘りに酒色に耽つて、心が狂つたために悪い行をいたしました。自分の我儘から家の破滅を招いて、澤山の生命を亡ぼす原因をつくりました。その罰があたつて、私は長い間この土地に亡命者となつてゐました。今では何か私の罪ほろぼしができて、祖先の家名を再興する事のできるやうにと、祈つてゐます。しかしさう云ふ事もできさうにありません。ただ、眞面目な懺悔をして、できるだけ不幸な人々を助けて、私の悪業の償ひをしたいと思います』

回龍はこのよい決心の告白をきいて喜んで主人に云つた、

『若い時につまらぬ事をした人が、後になつて非常に熱心に正しい行をするやうになる事を、これまでわしは見てゐます。悪に強い人は、決心の力で、又、善にも強くなる事は御經にも書いてあります。御身は善い心の方である事は疑はない。それでどうかよい運を御身の方へ向はせたい。今夜は御身のために讀經をして、これまでの悪業に打ち勝つ力を得られる事を祈りませう』

かう云つてから回龍は主人に『お休みなさい』を云つた。主人は極めて小さな部屋へ案内した。そこには寢床がのべてあつた。それから一同眠りについたが、回龍だけは行燈のあかりのわきで讀經を始めた。おそくまで讀經動行に餘念はなかつた。それからこの小さな寢室の窓をあけ

て、床につく前に、最後に風景を眺めようとした。夜は美しかつた。空には雲もなく、風もなかつた。強い月光は樹木のはつきりした黒影を投げて、庭の露の上に輝いてゐた。きりぎりすや鈴蟲の鳴き聲は、騒がしい音楽となつてゐた。近所の瀧の音は夜のふけるに随つて深くなつた。回龍は水の音を聽いて居ると、渴きを覺えた。それで家の裏の竈を想ひ出して、眠つて居る家人の邪魔をしないで、そこへ出て水を飲まうとした。楔をそつとあけた。さうして、行燈のあかりで、五人の横臥したからだを見たが、それには何れも頭がなかつた。

直ちに——何か犯罪を想像しながら——彼はびつくりして立つた。しかし、つぎに彼はそこに血の流れてゐない事と、頭は斬られたやうには見えない事に氣がついた。それから彼は考へた。『これは妖怪に魅まされたか、或は自分はろくろ首の家におびきよせられたのだ。……「搜神記」に、もし首のない胴だけのろくろ首を見つけて、その胴を別の處にうつして置けば、首は決して再びもとの胴へは歸らないと書いてある。それから更にその書物に、首が歸つて来て、胴が移してある事をさとれば、その首は毬のやうにはねかへりながら三度地を打つて、——非常に恐れて喘ぎながら、やがて死ぬと書いてある。ところで、もしこれがろくろ首なら、禍をなすもの故、——その書物の教へ通りにしても差支はなからう』……

彼は主人の足をつかんで、窓まで引いて来て、からだを押し出した。それから裏口に來て見ると戸が締つてゐた。それで彼は、首は開いてゐた屋根の煙出しから出て行つた事を察した。靜かに戸を開けて庭に出て、向うの森の方へできるだけ用心して進んだ。森の中で話し聲が聞えた、

それでよい隠れ場所を見つけるまで影から影へと忍びながら——聲の方向へ行つた。そこで、一本の樹の幹のうしろから首が——五つとも——飛び廻つて、そして飛び廻りながら談笑して居るのを見た。首は地の上や樹の間で見つけた蟲類を喰べてゐた。やがて主人の首が喰べる事を止めて云つた、

『あゝ、今夜来たあの旅の僧、——全身よく肥えて居るぢやないか、あれを皆で喰べたら、さぞ満腹する事であらう。……あんな事を云つて、つまらない事をした、——だからおれの魂のため、讀經をさせる事になつてしまつた。經をよんで居るうちは近よる事がむつかしい。稱名を唱へて居る間は手を下す事はできない。しかしもう今は朝に近いから、多分眠つたらう。……誰かうちへ行つて、あれが何をして居るか見届けて来てくれないか』

一つの首——若い女の首——が直ちに立ち上つて蝙蝠のやうに軽く、家の方へ飛んで行つた。數分の後、歸つて来て、大驚愕の調子で、しやがれ聲で叫んだ、

『あの旅僧はうちにゐません、——行つてしまひました。それだけではありません。もつとひどい事には、主人の體を取つて行きました。どこへ置いて行つたか分りません』

この報告を聞いて、主人の首が恐ろしい様子になつた事は月の光で判然と分つた。眼は大きく開いた、髪は逆立つた、齒は軋つた。それから一つの叫びが唇から破裂した、忿怒の涙を流しながらどなつた、

『からだを動かされた以上、再びもと通りになる事はできない。死なねばならない。……皆これ

があの僧の仕業だ。死ぬ前にあの僧に飛びついてやらう、——引き裂いてやらう、——喰ひつくしてやらう。……あゝ、あすこに居る——あの樹のうしろ——あの樹のうしろに隠れて居る。あれ、——あの肥つた臆病者』……

同時に主人の首は他の四つの首を随へて、回龍に飛びかかつた。しかし強い僧は手ごろの若木を引きぬいて武器とし、それを打ちふつて首をなぐりつけ、恐ろしい力でなぎたててよせつけなかつた。四つの首は逃げ去つた。しかし、主人の首だけは、如何に亂打されても、必死となつて僧に飛びついて、最後に衣の左の袖に喰ひついた。しかし回龍の方でも素早くまげをつかんでその首を散々になぐつた。どうしても袖からは離れなかつたが、しかし長い呻きをあげて、それからがくことを止めた。死んだのであつた。しかしその齒はやはり袖に喰ひついてゐた。そして回龍のありたけの力をもつてしても、その顎を開かせる事はできなかつた。

彼はその袖に首をつけたままで、家へ戻つた。そこには、傷だらけ、血だらけの頭が胴に歸つて、四人のろくろ首が坐つて居るのを見た。裏の戸口に僧を認めて一同は『僧が來た、僧が』と叫んで反對の戸口から森の方へ逃げ出した。

東の方が白んで來て夜は明けかかつた。回龍は化物の力も暗い時だけに限られて居る事を知つてゐた。袖について居る首を見た——顔は血と泡と泥とで汚れてゐた。そこで『化物の首とは——何と云ふみやげだらう』と考へて大聲に笑つた。それから僅かの所持品をまとめて、行脚をづづげるために、徐ろに山を下つた。

直ちに旅をつづけて、やがて信州諏訪へ來た。諏訪の大通りを、肘に首をぶら下げたまま、堂と潤歩してゐた。女は氣絶し、子供は叫んで逃げ出した。餘りに人だかりがして騒ぎになつたので、捕吏が來て、僧を捕へて牢へ連れて行つた。その首は殺された人の首で、殺される時、相手の袖に喰ひついたものと考へたからであつた。回龍の方では問はれた時に微笑ばかりして何にも云はなかつた。それから一夜を牢屋ですごしてから、その土地の役人の前に引き出された。それから、どうして僧侶の身分として袖に人の首をつけて居るか、何故衆人の前で厚顔にも自分の罪惡の見せびらかしを敢てするか、説明するやうに命ぜられた。

回龍はこの間に對して長く大聲で笑つた、それから云つた、

『皆様、愚僧が袖に首をつけたのでなく、首の方から來てそこへついたので——愚僧迷惑至極に存じて居ります。それから愚僧は何の罪をも犯しません。これは人間の首でなく、化物の首でございます、——それから化物が死んだのは、愚僧が自分の安全を計るために必要な用心をしただけのことからで、血を流して殺したのではございません……それから彼は更に、全部の冒險談を物語つて、五つの首との會戰の話に及んだ時、又一つ大笑ひをした。』

しかし、役人達は笑はなかつた。これは剛腹頑固な罪人で、この話は人を侮辱したものと考へた。それでそれ以上詮索しないで、一同は直ちに死刑の處分をする事にきめたが、一人の老人だけは反對した。この老いた役人は審問の間には何も云はなかつたが、同僚の意見を聞いてから、立ち上つて云つた、『先づ首をよく調べませう、これが未だすんでゐないやうだから。もしこの僧

の云ふ事が本當なら、首を見れば分る。……首をここへ持つて来い』

回龍の背中からぬき取つた衣にかみついて居る首は、裁判官達の前に置かれた。老人はそれを幾度も廻して、注意深くそれを調べた。そして頸の項うなじにいくつかの妙な赤い記號らしいものを發見した。その點へ同僚の注意を促した。それから頸の一端がどこにも武器で斬られたらしい跡のない事を見せた。かへつて落葉が軸から自然に離れたやうに、その頸の断面は滑らかであつた。

……そこで老人は云つた、

集 靈 八 泉 小
『僧の云つた事は全く本當としか思はれない。これはろくろ首だ。「南方異物志」に、本當のろくろ首の項うなじの上には、いつでも一種の赤い文字が見られると書いてある。そこに文字がある。それはあとで書いたのではない事が分る。その上甲斐の國の山中には餘程昔から、こんな怪物が住んで居る事はよく知られて居る。……しかし』回龍の方へ向いて、老人は叫んだ——『あなたは何と強勇なお坊さんでせう。たしかにあなたは坊さんには珍らしい勇氣を示しました。あなたは坊さんよりは、武士の風がありますな。多分あなたの前身は武士でせう』

『如何にもお察しの通り』と回龍は答へた。『剃髮の前は、久しく弓矢取る身分であつたが、その頃は人間も惡魔も恐れませんでした。當時は九州磯貝平太左衛門武連と名のつてゐましたが、その名を御記憶の方も或はごさいませう』

その名前を名のられて、感嘆のささやきが、その法廷に満ちた。その名を覚えて居る人が多數居合せたからであつた。それからこれまでの裁判官達は、忽ち友人となつて、兄弟のやうな親切

をつくして感嘆を表はさうとした。恭しく國守の屋敷まで護衛して行つた。そこでさまざまの歡待饗應をうけ、褒賞を賜はつた後、やうやく退出を許された。面目身に餘つた回龍が諷訪を出た時は、このはかない娑婆世界でこの僧程、幸福な僧はないと思はれた。首はやはり携へて行つた——みやげにすると戯れながら。

さて、首はその後どうなつたか、その話だけ残つて居る。

諷訪を出て一兩日のあと、回龍は淋しい處で一人の盜賊に止められて、衣類を脱ぐ事を命ぜられた。回龍は直ちに衣（ころも）を脱して盜賊に渡した。盜賊はその時、始めて袖にかかつて居るものに氣がついた。さすがの追剥ぎも驚いて、衣（ころも）を取り落して、飛び退いた。それから叫んだ、『やあ、こりやとんでもない坊さんだ。おれよりもつと悪黨だね。おれも實際これまで人を殺した事はあゝる、しかし袖に人の首をつけて歩いた事はない。……よし、お坊さん、こりやおれ達は同じ商賣仲間だぜ、どうしてもおれは感心せずには居られない。ところで、その首はおれの役に立ちさうだ。おれはそれで人をおどかすんだね。賣つてくれないか。おれのきものと、この衣（ころも）と取り替へよう、それから首の方は五兩出す』

回龍は答へた、

『お前が是非と云ふなら、首も衣も上げるが、實はこれは人間の首ぢやない。化物の首だ。それで、これを買つて、そのために困つても、わしのために欺かれたと思つてはいけない』

『面白い坊さんだね』追剝ぎが叫んだ。『人を殺してそれを冗談にして居るのだから。……しかし、おれは全く本氣なんだ。さあ、きものはここ、それからお金はここにある。——それから首を下さい。……何もふざけなくつてもよからう』

『さあ、受け取るがよい』回龍は云つた。『わしは少しもふざけてゐない。何かをかしい事でも若しあれば、それはお前がお化けの首を、大金で買ふのが馬鹿げてゐてをかしいと云ふ事だけさ』それから回龍は大笑をして去つた。

こんなにして盜賊は首と、衣を手に入れて暫らく、お化の僧となつて追剝ぎをして歩いた。しかし諷訪の近傍に来て、彼は首の本當の話を聞いた。それからろくろ首の亡靈の祟りが恐ろしくなつて來た。そこでもとの場所へ、その首をかへして、體と一緒に葬らうと決心した。彼は甲斐の山中の淋しい小屋へ行く道を見つけたが、そこには誰もゐなかつた。體も見つからなかつた。そこで首だけを小屋のうしろの森に埋めた。それからこのろくろ首の亡靈のために施餓鬼を行つた。そしてろくろ首の塚として知られて居る塚は今日もなほ見られる。(とにかく、日本の作者はさう公言する)

Kokuro-Ashi (Kwanidan)

(田部隆次譯)